

# ZOCALO 2014 8 ▶ 9

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

## 機能主義と官能性 企画展「戦後日本住宅伝説 — 挑発する家・内省する家」 会期：2014年7月5日(土)～8月31日(日)

機能主義という概念がある。よりよく機能するという目的性だけに基いてデザインするという考え方である。そのデザインが結果的に美しければ、機能主義=機能美という“万人にとっての幸福”をもたらす概念ということになるだろう。時計や蒸気機関車などのメカニズムの魅力や流体抵抗を最小限にしながらか最大限の体積を確保する航空機などの流線型の美しさは、その概念の正しさを告げているように思われるが、ではなぜ私たちがそれを美しいと感じるかと言われると、はかばかしい答えを思いつかない。



出展作品より 伊東豊雄《中野本町の家》1976年 撮影：大橋富夫

たとえば例の“利己的な遺伝子”の理論に基づいて、機能するものを美と感じるような遺伝子を持つ人間の方が競争的な環境の中での生存により適していたので自然淘汰的にそうなったのだという意見がありうるかもしれない。もっともらしい理屈ではあるが、メカニズムの塊である機関銃や流線型の究極であるジェット戦闘機などの武器の機能を考えるなら、その美しさをもたらすのはより効率の良い殺戮の機能ということになってしまう。

モラル的にいえば、機能主義とは空恐ろしいニヒリズムをはらんでもいるのである。

周知のようにモダニズム建築においても、機能主義は様式主義の時代の終焉を告げ、合理精神に基づいた普遍性を(“国際様式”)を世界各地にもたらすことになった。住宅建築もその例外ではない。いかにもコルビュジェは「住宅は住む機械である」という明快極まりないテーゼを唱えたのだが、しかしたとえば彼のマルセイユの集合住宅(ユニテ・ダビタシオン)を見るならば、私たちに強く印象づけるのは合目的性というよりは、むしろ機能主義と裏腹になった豊饒なる官能性であるように思われる。ピロティに並ぶ逆円錐形の柱や屋上の造作のコンクリートのマスの存在感がそうであるし、また廊下やメゾネットになった各住戸の吹き抜け以外の部分の天井の低さは、西洋建築



出展作品より 白井晟一《虚白庵》1970年 撮影：新建築社写真部

の高い天井に慣れた目にはゾクッとするほどセクシーな空間でもある。

本展で紹介する16の住宅伝説の多く(すべてではない)もまた広い意味でのモダニズム建築のコンテクストに属しているが、ということは機能主義を巡る不穏なニヒリズムや官能性とも無縁ではありえないし、あえていうならばそうした側面が一層加速されているようにさえ思われるのである。

合目的性の名のもとに、そのような特異な造作を可能にしたのは鉄でありコンクリートであるのだが、いうまでもなくこれらは敗戦からの復興と高度経済成長を象徴する工業素材でもある。個人住宅の壁や廊下や階段に密かに(時には如実に)産業や都市のメタファーが作用しているといってもよい。その意味においても普遍性への信仰とは程遠い、戦後の日本という特定の場所、特定の時代を体現した作品群なのである。



出展作品より 安藤忠雄《住吉の長屋》1976年 撮影：新建築社写真部

誤解のないように付け加えれば、そこに示されるのは何も地域的、風土的な固有性ということではない。それらはモダニズムのドグマによって引き裂かれた文化が生み出したさまざまな特殊解であり、そうであるにもかかわらず、いや、それゆえにこそ私たちにあってより一層、蠱惑的でもある光景をなしているのだ。(建哲首・埼玉県立近代美術館長)

### SMF 第2ステージにあなたとどこでもアート／小さな家プロジェクト始動

斬新で企画性の高い展示をめざす埼玉県立近代美術館の姿勢を示すため、「常設展」の名称を「MOMAS(モマス)コレクション」に改めたのは2008年でした。そして、もうひとつこの年にデビューして美術館と伴走を続けてきたものに「SMF(エスエムエフ)」があります。SMFは「Saitama Muse Forum」の略で、埼玉県内のミュージアムをさまざまな美神たちの広場として開き活用していこうという願いを込めて名付けられたものです。2008年に文化庁のモデル事業として実施された「LINK!ミュージアムからアートの風を!!」では、多くの方々の協力で作られた1,000本を超える色鮮やかな風車が公園やミュージアムの中庭に立ち並び、創作ダンスやバスカメラとともに、北浦和から川越、入間、鳩山、川口と県内各地をめぐる、爽やかなアートの風を送りました。デビューがこの「アートの風」増殖プロジェクトであったことから、カラフルな風車がSMFのロゴマークとなっています。

2008年から2012年までの5年間、「Saitama Art Platform 形成準備事業」として継続して実施してきたこの一連の事業は、埼玉県立近代美術館、うらわ美術館、川越市立美術館、川口市立アートギャラリー、入間市博物館の公立ミュージアム5館を中心とする実行委員会制で、文化庁の支援を得て行ってきたものです。この事業の企画・運営を担ってきたのは、美術のみならず、建築、音楽、文学、ダンスなど様々な分野で活発に活動する方々で構成されるSMFでした。

「アートを身近な場で享受し、支援し、再創造するためのプラットフォームづくりをめざしています」を旗印に多彩なアートプログラムを実施してきたSMFは、2013年にメンバーシップ制の会として再出発しました。文化庁の助成を受けない年にも、日常的な活動を継続できる基盤整備をめざすためです。SMFがミュージアムに蓄積されたさまざまな資源を掘り起こし、地域と結んで活発なアート活動のプラットフォームとなり、美術館と地域連携の新たなモデルとなることが期待されています。

この5月には、上記の5館が中心となった「あなたとどこでもアート 実行委員会」とSMFが連携し、文化庁から再び助成をいただき「小さな家プロジェクト」が始まりました。詩人・立原道造の夢の家、巨匠ル・コルビュジェの終の棲家となった休暇小屋、黒川紀章の中銀カプセルタワーのプロトタイプなど、

県内にはきわめてユニークで貴重な「小さな家」があります。この「小さな家をめぐる旅」が今年度のオープニングとなりました。「旅する小さな家」の魅力的な構想を公募し、実際に作ってこれを起点にアートを楽しむ事業を中心に、美術、音楽、ダンスなどジャンルを超えて「小さな家」を自由に解釈して展開する多彩なアートプログラムが、県内各地で開催されます。インターネット上にアートの開放区となるパビリオンを構築しようという企てや、今年の「小さな家(住)」に続いて「着る(衣)」、「食べる(食)」など、次年度以降の展開に向けてのプログラムも含め、20を超えるアートプログラムが計画されています。身近な場所でアートを再発見し、ご一緒に楽しみましょう。(M.N.)

※SMFのこれまでの活動、今年度の事業予定についてはSMFのホームページ(<http://www.artplatform.jp>)をご参照ください。

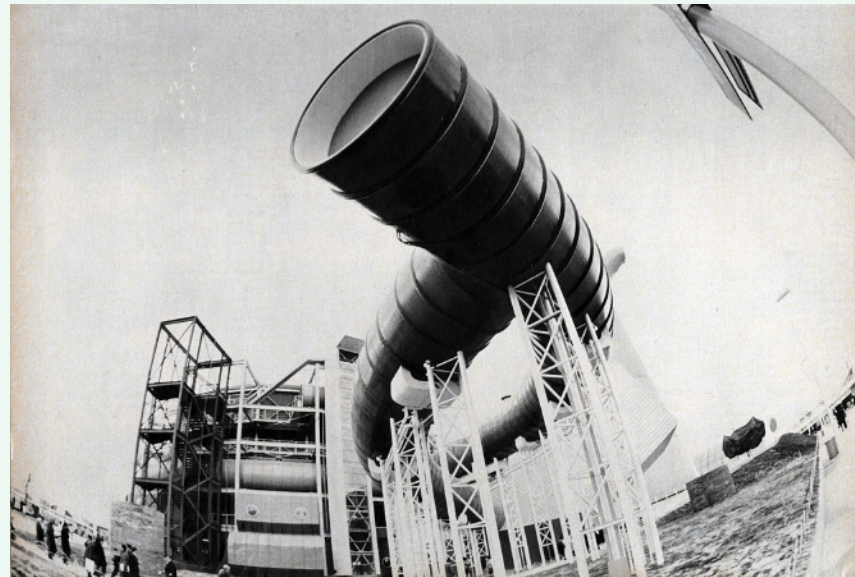


「小さな家をめぐる旅」のひとつ(ものづくり大学構内に復元されたカッパ・マルタン休暇小屋の前で)

### ふたたび、《位相一大地》をめぐる(後編：万博編)

前号からの連載となる後編では、1970年の日本万国博覧会において再制作された《位相一大地》を紹介いたします。まず、作者の関根伸夫さんにお送りした質問に対する回答です(2014年3月12日・筆者宛メールから抜粋)。

「東野芳明さんが当時三井館のチームに所属していて、最後の段階で庭園部に、《位相一大地》をつくるよう提案して、受



け入れられたようです。(略)万博敷地内はおもちゃ箱をひっくり返したような状況でしたから、何処に何があると認識出来る人はほぼ居なかったはずですね。(略)工法は全く須磨離宮と同じやり方でした。しかし、直径は2.2mで高さが2m位と2.5mと3mの3組をつくった記憶があります。」(注：寸法は後日の情報提供です。)

次いで、《位相一大地》が3組!という衝撃を受けて開始した調査(継続中)の報告。三井グループ館の資料に「対話の散歩道の外部空間には関根伸夫製作の位相彫刻があります。」という記述があり、図面にも「オブジェ(位相彫刻)」とあります。さらに調査を進めると、ついに決定的な写真を発見!三井グループ館の裏側をとらえた写真の左下と右下に、土の円筒らしき物体が写っています。良く見ると、右下は前後の関係にある2つの円筒が重なっているように見え、関根さんの証言と一致する3組となり、再制作というより、《万博版・位相一大地》と言えます。皆さんにはどう見えるでしょうか?写真掲載を優先したため、すでに紙幅が尽きましたが、いずれ詳細を報告したいと思います。調査にご協力いただいた方々にお礼を申し上げ、2回



にわたる連載をひとまず締めくくります。(G.U.)

※ソカロ第69号に掲載されている前編もご参照ください。(ソカロのバックナンバーは当館ホームページからご覧いただけます。)

出典: Bruno Suter & Peter Knapp, 500 pictures of the Osaka Expo 70, 1970, p.400 (同書掲載写真は裏焼きのため左右反転して転載。部分画像は、左右反転した画像からトリミングし、水平に見えやすくするよう角度を調整。)